

総合常任委員会行政視察報告について

このことについて、総合常任委員会委員長から別紙のとおり報告があったので付議する。

平成27年12月15日

三笠市議会議長 谷津邦夫

# 総合常任委員会行政視察報告書

平成 27 年 9 月 25 日第 3 回定例会において承認を得た当委員会行政視察の実施結果について、三笠市議会基本条例第 12 条第 4 項の規定により、次のとおり報告する。

平成 27 年 12 月 15 日

総合常任委員会委員長 谷内 純 哉

三笠市議会議長 谷津 邦 夫 様

## 記

### 1 視察期間

平成 27 年 11 月 5 日（木）～8 日（日）

### 2 視察項目

#### (1) 秋田県小坂町

産業遺産と鉄道によるまちづくりについて

#### (2) 三重県多気町

高校生レストランまごの店について

### 3 視察参加者

谷内委員長、折笠副委員長、只野・畠山・澤田・武田・齊藤・儀惣・谷津各委員

### 4 視察の内容

別紙報告書のとおり

(別紙)

## 総合常任委員会行政視察報告書

### 1 視察項目

#### (1) 秋田県鹿角郡小坂町 「産業遺産と鉄道によるまちづくりについて」

視察地である小坂町は、平成 27 年 8 月末現在で人口 5,540 人、昭和 30 年 4 月に小坂町と七滝村が合併し、以来平成の大合併の時も加わらず現在に至っている。小坂町には、国立公園「十和田湖」があり、四季折々の美しい景観を見せ、湖畔には多くのホテルや民宿が建ち並び、毎年多くの観光客が訪れている。

小坂町発展の歴史は、当市と類似しており、文久元年（1861 年）に小坂鉱山が発見されて以来、経済や文化も鉱山とともに栄え、「鉱山のまち」として歩んできた。また、鉱石を製錬する過程で発生する化学物質を運搬するために、鉄道が敷かれ、平成 21 年まで稼働していた。小坂鉱山は、当初は銀山として始まり、明治 30 年代には銅山として飛躍的に発展したものの、やはり衰退の一途をたどる中、有名な観光地としての十和田湖があるものの、町の中心からは 20 キロと離れていることから十和田湖の観光は別物という考えもあり、町の中心での観光振興に取り組むこととなった。そのきっかけとなったのが、鉱山従業員の福利厚生施設として建設された日本最古の芝居小屋「康楽館」の復興である。この康楽館では、現在も定期的に芝居が行われており、明治期を思わせる外観と大きなのぼりが乱立する姿は、当時の雰囲気醸し出していた。康楽館の整備後、「小坂鉱山事務所」の譲渡の話があり、町としては近代化遺産の象徴である鉱山事務所であることから、保存しながら活用しようと、500 メートルほど離れた場所から康楽館の隣地に移築し、物販やレストランなどが営業されている。これらの施設は、建造物として、国の重要文化財に指定されている。

また、鉄道によるまちづくりとして、平成 26 年 6 月に「小坂レールパーク」をオープンさせている。車両の展示、ディーゼル機関車とラッセル車の体験運転のほか、青森上野間で活躍し昨年廃止となった寝台特急列車「あけぼの」を活用した宿泊施設を今年の 10 月末にオープンさせた。十和田湖周辺を除くと、町内にはほとんど宿泊施設がなく、通過型の観光であったことから、宿泊施設としてこのあけぼのを活用するために、JR から格安の値段で譲渡を受けたものである。オープンしてまだ 1 週間程度であるが、夕暮れ時には町内に観光客の姿があり、確実に経済効果が表れているとの

ことであった。

(2) 三重県多気郡多気町 「高校生レストランまごの店について」

視察地である多気町は、平成 27 年 8 月末現在で人口 15,131 人、平成 18 年 1 月 1 日に旧多気町と旧勢和村が合併し、新しく多気町と誕生している。常任委員会として「まごの店」を視察するのは、平成 21 年度に続き 2 度目である。

まごの店の視察に先立ち、町内で行われていた「第 3 回全国高校生“S”の交流フェア」を視察し、全国の食や職に関わる高校生が、地域の食材を生かして、地域の人たちと協力、共同で特産物を開発した事例が発表されていた。また、三笠高校からも 3 名の生徒が料理交流会に参加していた。

まごの店は、前回と同様に多くの客が訪れにぎわっていたが、その賑わいに拍車をかけていたのが、「まごの店スイーツ」である。視察日は、土曜日であったため、まごの店スイーツの営業日であり、10 時からの営業を前に、整理券を求める人が多く訪れていた。スイーツは、1 個 150 円から 250 円程度で販売されており、こちらは 11 時過ぎには完売していた。まごの店の開店前に相可高校村林教諭から「4 班のシフト制で調理と接客班に分かれて作業が行われ、調理の仕込みについては当日 2 日前から行い、当日には料理を温めたり揚げたりするだけで済むように準備をし、その日の天候などに合わせて 1 日 200 食から最大 250 食を提供している」などの説明を受けた。また、この日は、交流フェアに参加していた三笠高校生 3 名も調理に加わり、活躍する姿が見られた。まごの店では、3 種類のメニューをいずれも 1300 円で提供しているほか、おにぎりも販売しており、最近では不定期ではあるものの弁当の販売も行っている。まごの店の年間売上額は、約 4000 万円で 1 食当たりの原価率は 75%を占める。その残り分が利益となるわけであるが、ここから生徒が練習用に使用する食材の購入や、生徒が移動する際に使用するマイクロバスの購入などの経費に充て、収支均衡となって運営されている。

また、町内にあるショッピングセンターで相可高校食物調理科の卒業生が運営する「せんぱいの店」を視察した。ここでは、弁当や総菜を販売しており、現在町外にも店舗を拡大し、卒業生の受け皿となっている。

まごの店の仕掛け人である元多気町役場職員岸川政之氏と意見交換という形で研修を行った。岸川氏からは、「三笠高校生の次のステップは現場を持つことである。」などの話があり、委員からは「ビジネスを目的に高校に接触してくる企業とのかかわり

方など」についての質問が出され、「間に入って指導する役割の人が必要」と意見を交わした。

## 2 総括

今回の視察で強く印象に残ったことは、いずれの施設も複合的な集客要素を持っていることである。特に小坂町は、主要施設である「小坂鉱山事務所」「康楽館」そして「小坂レールパーク」が1キロメートルの範囲で整備されており、徒歩での移動が可能で、一つのテーマパークのようである。施設を集約することでまちづくりのテーマが一目瞭然となっており、実に見事に明治期の雰囲気再現されていた。また、多気町「まごの店」は、ふるさと村の中にあり、村内には農産物直売所やパークゴルフ場などがあり、食事以外に買い物をしたり遊んだりすることができる。まごの店を開店させるに当たり、多くの人々が訪れる観光地であったことがあの場所を選んだ理由の一つである。今後のまちづくりを考える際にも、集客要素を複合的に取り入れるとともに、長年の懸案であるが既存の施設を線でつなげていくために三笠ジオパークを主としながら、何が必要かを考えていかなければならないところである。

まちづくりに近代化産業遺産を活用した小坂町は、昭和60年代から現在に至るまで一つずつ施設を整備してきたところである。これまでの取組みが町の中心部に美しい一体的な歴史的景観を創出し、産業遺産を目的にした観光客が増加するにつれて町民の理解が得られ、近年町民による自主的な活動も生まれているとのことで、成功事例が町民の目に見えることでさらに良い方向へとつながっており、観光に限ったことではなくまちづくりが目に見えることの重要性を感じたところである。当市においても、三笠高校がまさに成功事例として市民の目に映り、市民が高校生を育てようとする環境が広がりつつある。そして、今回視察したまごの店は、屋台の店から始まり、いくつかのステップを踏み、今や三重県のブランドまでに成長した非常に参考とすべき成功事例である。当市においても、まずは三笠ブランドとして取り組むためにも一つ一つの課題を乗り越えなければならぬと強く感じたところである。高校生も時間をかけ様々な実習を積み重ねていく必要もあると思うし、そのためにハード面を充実させなければならぬこともある。そして、これまでも相可高校から多くのことを学んでいるが、三笠高校が次のステップに踏み出すためには、今後も連携を密にしていかなければならぬと感じたところである。

この度の視察では、高校生レストランによるまちの活性化は後から結果的についてく

るものであること、そのため、大人を目線やまちのために店を行うのではなく生徒たちのために行うべきものであり、生徒たちのことを一番に考え、生徒が現場でコスト管理や接客を学ぶために何が必要であるかを今後検討するために、大変有意義な視察であった。